

# 述語形容詞を伴った 結果構文の統語構造について

人 見 明 宏

## 0. 序

「結果構文」(Resultativkonstruktion ; Dudenband 4.—Die Grammatik (2009) S. 790) とは、主語と動詞のほかに、4格の名詞句および形容詞句からなる構文であり<sup>1)</sup>、以下の(1)および(2)がその例である。

- (1) Er aß seine Eltern arm.
- (2) Ein Dieb stiehlt sich selten reich.

(1)では動詞 *essen* が「人間」を表す「目的語」、また(2)では *stehlen* が再帰代名詞 *sich* と結び付いており、結果構文であることがわからずに、これらの文を和訳すると「彼は彼の両親を哀れに食べた」「泥棒は自分をめったに豊かに盗まない」などになってしまう。しかし正しくは、(1)は「彼は両親の財産を食いつぶした」を、(2)は「泥棒が盗みをして金持ちになることはめったにない、悪銭身につかず」を意味する。

結果構文に関しては、人見(2012)で、部分的に添加成分の述語形容詞を伴った結果構文の統語構造についても論じ、その統語構造も明らかにした。さらに、人見(2012)での考察に基づいて、人見(2013)では、結果構文と類似したものである「搬動語法」の統語構造の分析を行い、その統語構造を明らかにした。人見(2012)および(2013)で行った考察は、人見(2012)では対象としなかった、擬似目的語が用いられた結果構文の統語構造の分析に適用することが可能であると考えられる。

そこで本論文では、まず述語形容詞を伴った結果構文の統語的および意味的特徴を明らかにし、その例を挙げる。次に、人見(2012)および(2013)で行った考察を、擬似目的語が用いられた結果構文の統語構造の分析に適用することによって、その統語構造を明らかにし、依存関係文法でその統

語構造をいかに記述するべきかを考察する。

## 1. 述語形容詞を伴った結果構文

以下では、まず述語形容詞を伴った結果構文がどのような統語的・意味的特徴を持つのかを考察し、次に、結果構文の例を挙げる。

### 1.1. 結果構文の特徴

まず結果構文を構成する要素について述べる。結果構文は、1格の名詞句(主語)と動詞のほかに、4格の名詞句と形容詞句とによって構成される。以下の(3)と(4)は結果構文の例であるが、den Tischが4格の名詞句、sauberが形容詞句である。

(3) Die Kellnerin machte den Tisch sauber.

(4) Die Kellnerin putzte den Tisch sauber.

次に、結果構文の意味であるが、これは二つのタイプに大別される。第一のタイプは、同定の機能を持つ、本来の作為動詞(Faktivum)<sup>2)</sup>が用いられている場合であり、先の例(3)がこれにあたる。(3)におけるmachenは「～を…にする」を表し、その文意は「ウエートレスはテーブルをきれいにする」である。Dudenband 4.—Die Grammatik (2009)では、以下のような書き換えが可能であるとされている(Dudenband 4.—Die Grammatik (2009) S. 790)。

(5) Otto machte den Tisch sauber.

→ Otto machte, dass der Tisch sauber wird.

第二のタイプは、先の例(4)における動詞putzenのように、同定の機能を持たない動詞が用いられている場合である。このタイプは、Dudenband 4.—Die Grammatik (2009)では、以下のような書き換えが可能であるとされている(Dudenband 4.—Die Grammatik (2009) S. 791)。

- (6) Otto putzt den Tisch sauber.  
→ Otto putzt den Tisch so, dass er sauber wird.

また、関口はその動詞の「意味形態」は *machen* であるとし（関口 (1966) S. 44、関口 (1983) S. 453）、4 格の名詞句に再帰代名詞<sup>3)</sup>が用いられた例であるが、以下の書き換えが可能であるとしている（関口 (1983) S. 453）。

- (7) sich dumm lesen  
→ sich durch Lesen dumm machen

橋本は、「動作の結果を、四格補足語に形容詞を添えて表わす語法がある」（橋本 (2009) S. 626）とし、関口と同様に、4 格の名詞句に再帰代名詞が用いられた文の書き換えとして、以下の例を挙げ（橋本 (2009) S. 626 f.）、「当該動詞に *machen* 『～ならしめる』の意が加わる」（橋本 (2009) S. 388）としている。

- (8) Ich habe mich krank getrunken.  
→ Ich habe mich durch Trinken krank gemacht.

有田も、このタイプの結果構文は「～することによって～を～にする」（有田 (1990) S. 89）の文意であるとし、(7) および (8) と同様の書き換えが可能であるとしている（有田 (1990) S. 88）。

このように、結果構文における形容詞句は、動詞が表す行為・事象によって引き起こされる結果を表す<sup>4)</sup>。そして、結果構文が表す意味は、同定の機能を持つ作為動詞では「～を…にする」、同定の機能を持たない動詞では「…することによって～を…にする」である。

最後に、結果構文で用いられる 4 格の名詞句と形容詞句の統語機能および補足成分・添加成分の別について考察する。まず、動詞 *machen* が「～を…にする」を意味している先の例 (5) では、*machen* が他動詞であり、4 格の名詞句 *den Tisch* は *machen* の 4 格目的語である。一方、形容詞句 *sauber* は、上記の書き換え (*Otto machte, dass der Tisch sauber wird.*) のように、コプラ動詞 *werden* と主語 *der Tisch* の述語内容語に書き換えることができることから、元の文 *machen* の 4 格目的語 *den Tisch* に対する述語内

容語、すなわち目的語の述語内容語である。

先の例(3)で、4格の名詞句 *den Tisch* を削除した以下の a は非文になり、これは動詞に支配された補足成分である。また、形容詞句 *sauber* を削除した b は、非文にはならないが、元の文とは異なる意味になるため、これも動詞の補足成分である<sup>5)</sup>。なお、c のように 4 格の名詞句と形容詞句の両者を削除したときも、非文になる。

- (3) Die Kellnerin machte den Tisch sauber.  
→ a.\*Die Kellnerin machte sauber.  
→ b. Die Kellnerin machte den Tisch.  
→ c.\*Die Kellnerin machte.

先の例(4)の動詞 *putzen* も他動詞であり、4格の名詞句 *den Tisch* を削除した以下の a は非文になり、これは動詞に支配された4格目的語であり、補足成分である。一方、(3)とは異なり、動詞 *putzen* は同定の機能を持たないため、目的語の述語内容語である形容詞句 *sauber* を削除した b は非文とはならず、これは動詞の添加成分である。なお、c のように4格の名詞句と形容詞句の両者を削除したときは、非文になる。

- (4) Die Kellnerin putzte den Tisch sauber.  
→ a.\*Die Kellnerin putzte sauber.  
→ b. Die Kellnerin putzte den Tisch.  
→ c.\*Die Kellnerin putzte.

(4)のように、本来、目的語の述語内容語を支配しない他動詞の場合、このような動詞が目的語の述語内容語を伴うことによって、当該の文が結果構文になるのである。

次の例(9)も結果構文の例であるが、この場合は(3)および(4)と事情が異なる。aのように4格の名詞句 *ihr Taschentuch* を削除しても、非文にはならないが、元の文とはその文意が大きく異なる、または意味的に許容できない文となるため、この書き換えは成立しない。また、bのように形容詞句 *nass* を削除すると非文になる。一方、cのように、4格の名詞句と形容詞句の両者を削除した場合は、非文とはならない。

(9) Die Frau weinte ihr Taschentuch nass.

→ a. Die Frau weinte nass.

→ b.\*Die Frau weinte ihr Taschentuch.

→ c. Die Frau weinte.

(9)の動詞 *weinen* は、4格目的語を支配しない自動詞であり、4格の名詞句 *ihr Taschentuch* は、*weinen* の本来の目的語ではなく、擬似目的語である。

4格の再帰代名詞が用いられた、以下の例(10)も(9)と同じことが言える。すなわち、aのように4格の再帰代名詞を削除するという書き換えは成立しない。また、bのように形容詞句 *gesund* を削除すると非文になる。一方、cのように、4格の再帰代名詞と形容詞句の両者を削除した場合は、非文とはならない。

(10) Die Frau schlief sich gesund.

→ a. Die Frau schlief gesund.

→ b.\*Die Frau schlief sich.

→ c. Die Frau schlief.

(10)の動詞 *schlafen* も自動詞であり、4格の再帰代名詞は、*schlafen* の本来の目的語ではなく、擬似目的語である。

(9)および(10)のcから、擬似目的語と目的語の述語内容語は添加成分であることがわかる。しかし、通常、複数の添加成分が生起している場合は、その各々が削除可能である。たとえば、以下の文(11)における時の副詞的規定語 *jetzt* および場所の副詞的規定語 *in ihrem Zimmer* は、共に添加成分であり、*jetzt* を削除したa、*in ihrem Zimmer* を削除したb、および両者を削除したc、すべてが非文とはならない。

(11) Die Frau schläft jetzt in ihrem Zimmer.

→ a. Die Frau schläft in ihrem Zimmer.

→ b. Die Frau schläft jetzt.

→ c. Die Frau schläft.

これに対し、(9)および(10)の場合は、擬似目的語のみを削除するとい

う書き換えは成立せず、目的語の述語内容語のみを削除すると非文になる。それに対して、この両者を削除した場合のみ非文とはならない。結果構文における擬似目的語と目的語の述語内容語は、両者が共起する必要がある、両者の結合が動詞の一添加成分なのである<sup>6)</sup>。

(9) および(10)のように、4格目的語および目的語の述語内容語を支配しない自動詞の場合、このような動詞が擬似目的語と目的語の述語内容語を伴うことによって、当該の文が結果構文になるのである。

結果構文の統語的特徴をまとめたのが、次の表である。なお、以下では、同定の機能を持つ *machen* が用いられた先の例(3)のような結果構文を「結果構文Ⅰ」と、同定の機能を持たない他動詞が用いられた(4)のような結果構文を「結果構文Ⅱ」と、同定の機能を持たない自動詞が用いられた(9)および(10)のような結果構文を「結果構文Ⅲ」と称することにする。

	4格の名詞句	形容詞句
結果構文Ⅰ	目的語	目的語の述語内容語
	補足成分	補足成分
結果構文Ⅱ	目的語	目的語の述語内容語
	補足成分	添加成分
結果構文Ⅲ	擬似目的語	目的語の述語内容語
	添加成分	

## 1.2. 結果構文Ⅱ・Ⅲの例

結果構文Ⅰで用いられる代表的な動詞は、上述の *machen* のほかに、*stimmen* 「～を…の気分させる」などわずかしかない。そこで以下では、a) 結果構文Ⅱ、b) 結果構文Ⅲの主な例を挙げる。

### a) 結果構文Ⅱの例

- er<sup>A</sup> gerade biegen* (曲がったもの)をまっすぐに直す  
*er<sup>A</sup> glatt bügeln* ～にアイロンをかけてしわを伸ばす  
*er<sup>A</sup> platt drücken* ～を押してぺちゃんこにする  
*er<sup>A</sup> rot färben* ～を赤く染める  
*er<sup>A</sup> glatt feilen* ～をやすりで磨いてつるつるにする  
*er<sup>A</sup> glatt hobeln* ～にかんなをかけて平らにする

- et*<sup>A</sup> flach klopfen ～をたたいて平らにする  
*et*<sup>A</sup> weich klopfen (肉など)をたたいてやわらかくする  
*et*<sup>A</sup> fest kneten ～を固く練る  
*et*<sup>A</sup> weich kochen  
(肉など)をやわらかく煮る、(卵)を半熟のゆで卵にする  
ein Ei hart kochen 卵を固ゆでにする  
*j*<sup>A</sup> wach küssen (眠っている)～にキスをして起こす  
*et*<sup>A</sup> fein [grob] mahlen ～を細かく [粗く] ひく  
*et*<sup>A</sup> blank polieren [reiben] ～をピカピカに磨く  
*et*<sup>A</sup> sauber putzen ～をきれいに拭く [磨く]  
*et*<sup>A</sup> blank [weiß] scheuern ～を磨いてピカピカ [真っ白]にする  
*j*<sup>A</sup> krumm und lahm schlagen ～を足腰の立たぬほどに殴る  
*j*<sup>A</sup> blutig schlagen ～を殴って血まみれにする  
*et*<sup>A</sup> scharf [spitz] schleifen ～を研いで鋭くする [とがらす]  
*et*<sup>A</sup> kurz schneiden ～を短く切る  
*et*<sup>A</sup> weiß streichen ～を白く塗る  
*et*<sup>A</sup> sauber [weiß] waschen ～を洗ってきれいに [白く]する

b) 結果構文Ⅲの例

- sich*<sup>3</sup> die Hände wund arbeiten 働きすぎて両手を痛める  
*sich*<sup>4</sup> müde arbeiten 働き疲れる  
*j*<sup>A</sup> arm essen [fressen] ～の財産を食いつぶす  
den Teller leer essen 皿の料理を平らげる  
*sich*<sup>3</sup> den Bauch voll essen 腹いっぱい食べる  
*sich*<sup>4</sup> krank essen 食あたりする  
*sich*<sup>4</sup> satt essen 満腹する  
*sich*<sup>4</sup> heiser fragen 質問しすぎて声がかれる  
*sich*<sup>3</sup> die Füße wund gehen 歩きすぎて足を痛める<sup>7)</sup>  
*sich*<sup>4</sup> lahm gehen 歩きすぎて足を引きずる  
*sich*<sup>4</sup> müde kämpfen 戦い疲れる  
*sich*<sup>4</sup> heiser klagen 嘆き悲しんで声をからす  
*sich*<sup>4</sup> satt [müde] lesen 読みあきる [疲れる]  
*sich*<sup>4</sup> heiser reden しゃべって声をからす

*sich*<sup>4</sup> müde reisen 旅行して疲れる  
das Pferd müde reiten (馬に乗って) 馬を走り疲れさせる  
*sich*<sup>4</sup> heiser rufen 叫んで声をからす  
*sich*<sup>4</sup> satt schlafen たっぷり睡眠をとる  
*sich*<sup>4</sup> gesund schlafen 眠って元気を取り戻す  
*sich*<sup>3</sup> die Finger wund schreiben 指にたこができるほど書く  
*sich*<sup>4</sup> müde schreiben 書きくたびれる  
*sich*<sup>4</sup> müde schwimmen 泳ぎ疲れる  
*sich*<sup>4</sup> nass schwitzen 汗びっしょりになる  
*sich*<sup>4</sup> heiser singen 歌って声をからす  
*sich*<sup>4</sup> müde stehen 立ち疲れる  
das Glas leer trinken グラスを飲み干す  
*sich*<sup>4</sup> arm [krank] trinken 酒を飲み過ぎて貧乏 [病氣] になる  
*sich*<sup>4</sup> müde warten 待ちくたびれる  
*sich*<sup>3</sup> die Augen rot weinen 目を赤く泣きはらす  
*er*<sup>4</sup> nass weinen 泣いて (ハンカチなど) を濡らす  
*sich*<sup>4</sup> müde weinen 泣き疲れる

## 2. 述語形容詞を伴った結果構文の統語構造

以下では、結果構文の統語構造について考察するが、その際、上述のように、これを「結果構文Ⅰ」「結果構文Ⅱ」および「結果構文Ⅲ」の三つのタイプに分ける。なお、結果構文ⅠとⅡに関しては、人見(2012)および(2013)において考察した結果も含めている。また、結果構文Ⅲに関しては、人見(2013)において搬動語法の統語構造を扱ったが、その際、擬似目的語が用いられた搬動語法の構文についても考察しており、これが結果構文Ⅲの統語構造の分析・考察にも有効であるため、擬似目的語が用いられた搬動語法の統語構造に関して、人見(2013)の考察も概観することにする。

### 2.1. 結果構文Ⅰの統語構造

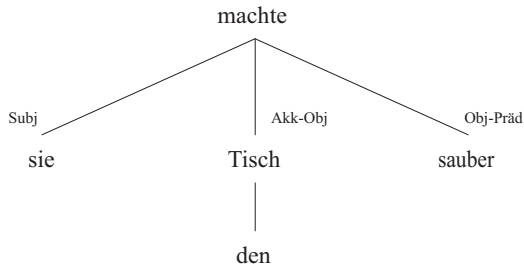
結果構文Ⅰは、「～を…にする」という意味を表す *machen* などの同定の機能を持つ動詞と、その動詞の補足成分である、本来の4格目的語およ



び補足成分の述語形容詞を伴ったタイプである。

次の文 (12) における *machen* は 4 格目的語を支配する他動詞である。また、形容詞 *sauber* の統語機能は述語内容語であり、動詞の表す行為によって生じる 4 格目的語 *den Tisch* の結果的状态を表している。この結果構文 (12) の統語構造は、以下のとおりである。

(12) Sie machte den Tisch sauber.



この樹形図では、主語 *sie*、4 格目的語 *den Tisch* および目的語の述語内容語 *sauber* が、他動詞 *machen* に支配された補足成分であり、そのためこの三つの要素がすべて *machen* と結合線で結ばれている<sup>8)</sup>。

## 2.2. 結果構文Ⅱの統語構造

結果構文Ⅱは、同定の機能を持たない動詞と、その動詞の補足成分である、本来の 4 格目的語および添加成分の述語形容詞を伴ったタイプである。人見 (2012) および人見 (2013) では、このタイプの統語構造を明らかにし、依存関係文法でこの統語構造をいかに記述すべきかを考察した。

次の文 (13) における *putzen* は 4 格目的語を支配する他動詞である。また、形容詞 *sauber* の統語機能は述語内容語であり、動詞の表す行為によって生じる 4 格目的語 *den Tisch* の結果的状态を表している。この結果構文 (13) は、以下の a と b の二つの文が統合されたものである。

(13) Sie putzte den Tisch sauber.

= a. Sie putzte den Tisch. + b. Sie *machte* den Tisch sauber.

そして、(13)a と b は樹形図で以下のように記述される。



た文(13)では、言語表現として現れない。そのため樹形図では、単に *Faktivum* と記述する。そして、動詞 *putzen* および *Faktivum* を頂点とする二つの統語構造が統合されていることを明示するために、これらのさらに上位に *Satz* という概念を導入する。

- 2) 他動詞 *putzen* に支配された補足成分は、主語 *sie* と 4 格目的語 *den Tisch* であり、両者はそれぞれ *putzen* と結合線で結ばれる。
- 3) 目的語の述語内容語 *sauber* は動詞 *putzen* によって支配された補足成分ではない。そのため、この述語内容語は *putzen* とは結合線で結ばれず、*Faktivum* と結合線で結ばれる。また、このことによって、目的語の述語内容語が動詞 *putzen* の添加成分であることを示している。
- 4) *Faktivum* と *sie* および (*den*) *Tisch* とを結び付けている結合線は、*Faktivum* と *sie*、*den Tisch* および *sauber* との関係を示しているものであり、言語表現に実際に現れている要素間の連結 (*Konnexion*) と区別するために、点線を用いている。

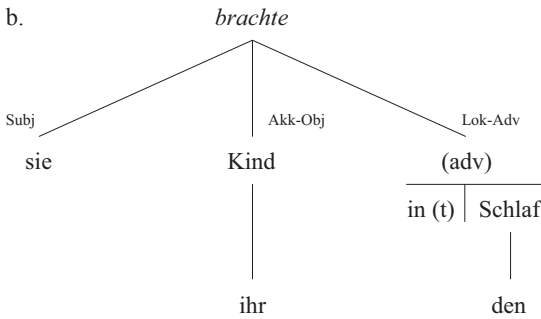
### 2.3. 結果構文Ⅲの統語構造

結果構文Ⅲは、同定の機能を持たない動詞と、その動詞の本来の 4 格目的語ではない擬似目的語および述語形容詞を伴ったタイプである。このタイプにおける擬似目的語と述語形容詞は、すでに述べたとおり、両者が共起する必要があり、両者の結合が動詞の一添加成分である。

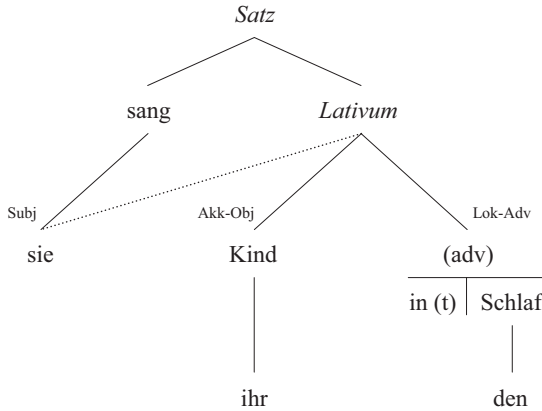
上述したように、まずここで、擬似目的語が用いられた搬動語法の統語構造について、人見(2013)の考察を概観する。以下の文(14)における 4 格の名詞句 *ihr Kind* は、動詞 *singen* の本来の目的語ではなく、擬似目的語である。この文(14)は、以下の a と b の二つの文が統合されたものである。

- (14) *Sie sang ihr Kind in den Schlaf.*  
= a. *Sie sang.* + b. *Sie brachte ihr Kind in den Schlaf.*

そして、(14)a と b は樹形図で以下のように記述される。



そして、a と b の二つの樹形図で表された統語構造が統合された文 (14) の統語構造を表したのが、以下の樹形図である。



この樹形図で表されているのは、以下の点である。

- 1) 文 (14)b で用いられている動詞は、搬動詞 (*Lativum*) の *bringen* である。これは、a と統合されて生じた文 (14) では、言語表現として現れない。そのため樹形図では、単に *Lativum* と記述する。そして、動詞 *singen* および *Lativum* を頂点とする二つの統語構造が統合されていることを明示しているのが、これらのさらに上位にある *Satz* である。
- 2) 自動詞 *singen* に支配された補足成分は、主語 *sie* のみであり、*singen* と結合線で結ばれるのも *sie* のみである。
- 3) 4 格の名詞句 *ihr Kind* は動詞 *singen* に支配された補足成分ではない。そのため、この名詞句は *singen* とは結合線で結ばれず、*Lativum* と結合線で結ばれる。また *singen* と 4 格の名詞句が結合線で結ばれていないことによって、(*ihr Kind* の統語機能は *Akk-Obj* と記載されるが) *ihr Kind* が動詞 *singen* の添加成分である擬似目的語であることを示している。
- 4) (*den*) *Schlaf* が変換詞 *t* である前置詞 *in* と結び付いた *in den Schlaf* は副詞相当語句 *adv* であり、その統語機能は、場所の副詞的規定語 (方向規定) である。この場所の副詞的規定語も動詞 *singen* によって支配された補足成分ではない。そのため、これも *singen* ではなく、*Lativum* と結合線で結ばれる。またこのことによって、場所の副詞的規定語が動詞 *singen* の添加成分であることを示している。
- 5) *Lativum* と *sie* を結び付けている結合線は、*Lativum* と *sie*、*ihr Kind* および *in den Schlaf* との関係を示しているものであり、言語表現に実際に現れている要素間の連結と区別するために、点線を用いている。

擬似目的語が用いられた搬動語法でも、擬似目的語と方向規定 (場所の副詞的規定語) は、両者が共起する必要がある、両者の結合が動詞の一添加成分である。これは、擬似目的語と方向規定が共に *Lativum* の補足成分であり、どちらも削除できない要素であるためである。なお、両者を削除した文が非文とはならないのは、樹形図の *Lativum* を頂点とする部分が削除されるからにほかならない。

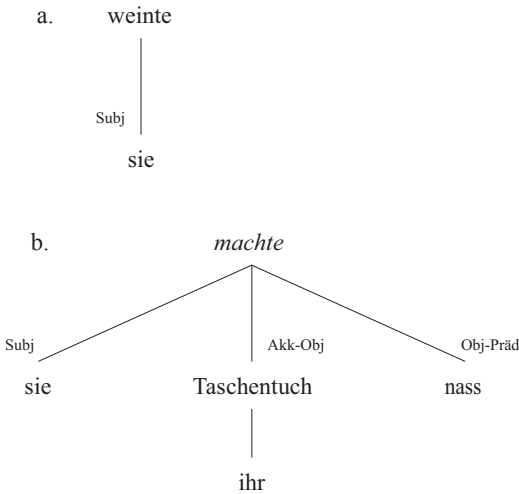
以上が、擬似目的語が用いられた搬動語法の統語構造に関する考察であ

るが、以下では、これを結果構文Ⅲの統語構造の考察に適用していく。

次の文(15)における *weinen* は、「泣く」という意味では4格目的語を支配しない自動詞である<sup>9)</sup>。したがって、(15)で生起している4格の名詞句 *ihr Taschentuch* は、*weinen* の本来の目的語ではなく、擬似目的語である。また、形容詞 *nass* の統語機能は述語内容語であり、動詞の表す行為によって生じる擬似目的語 *ihr Taschentuch* の結果的狀態を表している。この結果構文(15)は、以下の a と b の二つの文が統合されたものである。

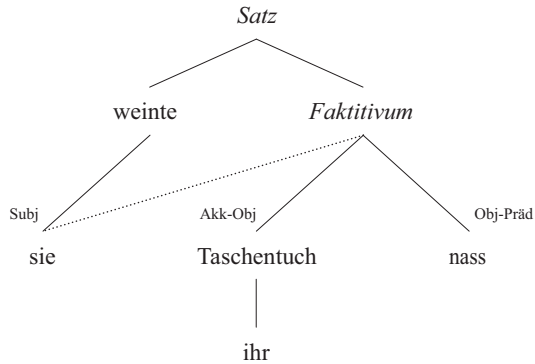
- (15) Sie weinte ihr Taschentuch nass.  
 = a. Sie weinte. + b. Sie *machte* ihr Taschentuch nass.

そして、(15)a と b は樹形図で以下のように記述される。



a と b の二つの樹形図で表された統語構造が統合された文(15)の統語構造を表したのが、以下の樹形図である。

述語形容詞を伴った結果構文の統語構造について



この樹形図で表されているのは、以下の点である。

- 1) 文 (15)b で用いられている動詞も、同定の機能を持つ作為動詞 (Faktivitum) の *machen* である。これは、a と統合されて生じた文 (15) では、言語表現として現れない。そのため樹形図では、単に *Faktivitum* と記述する。そして、動詞 *weinen* および *Faktivitum* を頂点とする二つの統語構造が統合されていることを明示しているのが、これらのさらに上位にある *Satz* である。
- 2) 自動詞 *weinen* に支配された補足成分は、主語 *sie* のみであり、*weinen* と結合線で結ばれるのも *sie* のみである。
- 3) 4 格の名詞句 *ihr Taschentuch* は動詞 *weinen* に支配された補足成分ではない。そのため、この名詞句は *weinen* とは結合線で結ばれず、*Faktivitum* と結合線で結ばれる。また *weinen* と 4 格の名詞句が結合線で結ばれていないことによって、(*ihr Taschentuch* の統語機能は *Akk-Obj* と記載されるが) *ihr Taschentuch* が動詞 *weinen* の添加成分である擬似目的語であることを示している。
- 4) 目的語の述語内容語 *nass* も動詞 *weinen* によって支配された補足成分ではない。そのため、この述語内容語も *weinen* ではなく、*Faktivitum* と結合線で結ばれる。また、このことによって、目的語の述語内容語が動詞 *weinen* の添加成分であることを示している。
- 5) *Faktivitum* と *sie* を結び付けている結合線は、*Faktivitum* と *sie*、

ihr Taschentuch および *nass* との関係を示しているものであり、言語表現に実際に現れている要素間の連結と区別するために、点線を用いている。

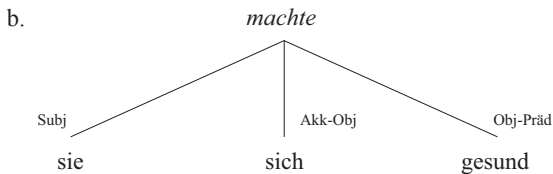
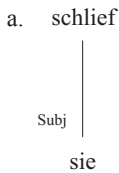
擬似目的語が用いられた結果構文では、擬似目的語と述語形容詞は、両者が共起する必要があり、両者の結合が動詞の一添加成分であると述べた。これは、擬似目的語と述語形容詞が共に *Faktivum* の補足成分であり、どちらも削除できない要素であるためである。なお、文(15)から両者を削除した文が非文とはならないのは、樹形図の *Faktivum* を頂点とする部分が削除されるからにほかならない。

最後に、再帰代名詞が擬似代名詞として用いられた結果構文の統語構造を取り上げる。(16)の動詞 *schlafen* は、「眠っている」という意味では目的語を支配しない自動詞である<sup>10)</sup>。したがって、(16)で生起している4格の再帰代名詞 *sich* は、*schlafen* の本来の目的語ではなく、擬似目的語である。そして、(16)は、以下の a と b の二つの文が統合されたものである。

(16) Sie schlief sich gesund.

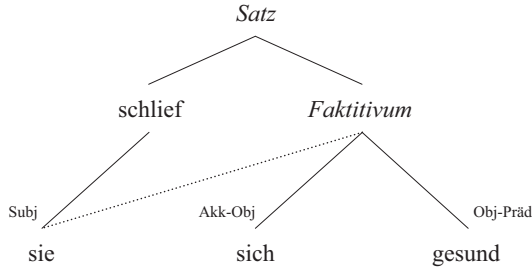
= a. Sie schlief. + b. Sie *machte* sich gesund.

そして、(16)a と b は樹形図で以下のように記述される。





a と b の二つの樹形図で表された統語構造が統合された文 (16) の統語構造を表したのが、以下の樹形図である。



この樹形図で表されているのは、(15) の場合と同様である。

### 3. まとめ

本論文では、述語形容詞を伴った結果構文を、それを構成する要素の統語的特徴に基づいて、三つのタイプ（結果構文Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）に分類し、それぞれの統語構造について考察してきた。特に結果構文Ⅲの統語構造に関しては、人見(2013)における搬動語法の統語構造に関する考察も適用した。

その結果、結果構文Ⅲも、結果構文Ⅱと同様に、二つの文が統合されて生じた文と考えることができることが判明した。そして、この二つのうちの一方には、言語表現には実際には生起していない動詞 *Faktivitum* を設定し、この二つの文の統語構造が一つの統語構造に統合されていることを明示するために、これら二つの統語構造のさらに上位に、*Satz* という概念を導入することによって、結果構文の統語構造を依存関係文法の理論において正確に捉えることができること、またその統語構造を樹形図でいかに記述すべきかを明らかにした。さらに、結果構文の統語構造をこのように捉えることによって、擬似目的語が用いられた結果構文では、擬似目的語と目的語の述語内容語の両者が共起する必要があり、両者を削除した文が非文とはならない理由の説明も可能となるのである。

## 注

- 1) 結果構文には、Er fuhr seinen Wagen zu Schrott. 「彼は(事故を起こして)車をめちゃくちゃに壊した」のような前置詞句を伴ったものなどもある。しかし、本論文では、これは考察の対象から除いているため、以下では、単に「結果構文」で「述語形容詞を伴った結果構文」を表す。
- 2) ここで言う作為動詞とは、形容詞と machen で言い換えられる形容詞派生の動詞、たとえば wärmen (warm machen) を指しているのではなく、「主に主語の動作・行為が目的語に及んだ結果として、特定の状態を表わす動詞」(田中(編)(1988) S. 211) を指している。machen は後者の作為動詞に属する。また有田(1990)においても、「machen 型は Faktitivum, Faktitiv (作為語法)」(有田(1990) S. 90) と言えるとある。
- 3) この再帰代名詞は、後述するが、動詞の擬似目的語である。
- 4) Dudenband 4.—Die Grammatik (2009) では結果の述語内容語 (resultatives Prädikativ) (Dudenband 4.—Die Grammatik (2009) S. 790)、また関口(1983)および有田(1990)では、「結果拳述」という名称が用いられている(関口(1983) S. 453、有田(1990) S. 85)。
- 5) 以下、例文の書き換えで用いられている矢印⇨は、書き換え後の文が元の文とは大きく意味が異なる、または意味的に許容できない文になるなど、書き換えが成立しないことを示している。
- 6) Dudenband 4.—Die Grammatik (2009) には、結果構文における擬似目的語と述語内容語について、Die Kombination von Bezugsphrase und Prädikativ hat den Status einer Angabe. とある(Dudenband 4.—Die Grammatik (2009) S. 791)。
- 7) gehen のような sein 支配の自動詞でも、4格の擬似目的語が用いられた結果構文では、Er hat sich die Füße wund gegangen. のように、haben 支配となる。
- 8) 以下の樹形図の記述の仕方は、Tesnière および代表的な依存関係文法の研究者の樹形図を参考にしている。また、本論文の樹形図で用いられている略号の意味は、以下のとおりである。

Subj : 主語 (Subjekt)

Akk-Obj : 4格目的語 (Akkusativobjekt)

Obj-Präd : 目的語の述語内容語 (Objektsprädikativ)

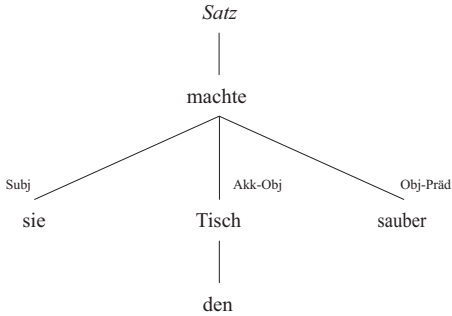
Lok-Adv : 場所の副詞的規定語 (Lokaladverbiale)

adv : 副詞相当語句

t : 変換詞 (Translativ, Translator)

なお、(12)の樹形図も、後述する Satz という概念を導入し、正確には以下のように記すべきである。

述語形容詞を伴った結果構文の統語構造について



しかし、以下では、二つの文が統合された場合を除き、簡略化した樹形図を用いることにする。

- 9) heiße Tränen weinen などにおける、内在目的語（同族目的語）は除く。  
10) den ewigen Schlaf schlafen などにおける、内在目的語（同族目的語）は除く。

### 参考文献

- 有田 潤 (1990): ドイツ語学講座 IV. 南江堂.  
Der kleine Wahrig. Wörterbuch der deutschen Sprache. (2007). Hrsg. von Renate Wahrig-Burfeind. Gütersloh, München.  
Dudenband 4.—Die Grammatik (1984). Hrsg. von Günther Drosdowski. 4. Aufl. Mannheim.  
Dudenband 4.—Die Grammatik (2005). Hrsg. von der Dudenredaktion. 7. Aufl. Mannheim, Leipzig, Wien, Zürich.  
Dudenband 4.—Die Grammatik (2009). Hrsg. von der Dudenredaktion. 8. Aufl. Mannheim, Zürich.  
Duden. Deutsch als Fremdsprache Standardwörterbuch. (2010). Hrsg. von der Dudenredaktion. Mannheim, Leipzig, Wien, Zürich.  
Dürscheid, Christa (2000): Syntax. Grundlagen und Theorien. Wiesbaden.  
Eisenberg, Peter (2004): Grundriß der deutschen Grammatik. Band. 2: Satz. Stuttgart, Weimar.  
Engel, Ulrich (1988): Deutsche Grammatik. Heidelberg.  
——— (1994): Syntax der deutschen Gegenwartssprache. 3. Aufl. Berlin.  
Engel, Ulrich / Helmut Schumacher (1978): Kleines Valenzlexikon deutscher Verben. 2. Aufl. Tübingen.  
Engel, Ulrich / Meliss, Meike (Hrsg.) (2004): Dependenz, Valenz und Wortstellung.

- München.
- Eroms, Hans-Werner (2000): *Syntax der deutschen Grammatik*. Berlin, New York.
- Flämig, Walter (1991): *Grammatik des Deutschen. Einführung in Struktur- und Wirkungszusammenhänge*. Berlin.
- Flämig, Walter et al. (1981): *Grundzüge einer deutschen Grammatik*. Berlin.
- 浜崎 長寿 / 橋本 政義 (2004) : 名詞・代名詞・形容詞. 大学書林.
- 橋本 文夫 (2009) : 復刻版詳解ドイツ大文法. 三修社.
- Helbig, Gerhard / Joachim Buscha (2001): *Deutsche Grammatik. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht*. Berlin, München.
- Helbig, Gerhard / Wolfgang Schenkel (1975): *Wörterbuch zur Valenz und Distribution deutscher Verben*. Leipzig.
- Hentschel, Elke / Harald Weydt (1994): *Handbuch der deutschen Grammatik*. 2. Aufl. Berlin, New York.
- (2003): *Handbuch der deutschen Grammatik*. 3. Aufl. Berlin, New York.
- 人見 明宏 (2012) : 述語内容語的付加語を伴った文の統語構造について. In : 愛知県立大学外国語学部紀要第44号 (言語・文学編)、S. 185–206.
- (2013) : 「搬動語法」の統語構造について. In : 愛知県立大学外国語学部紀要第45号 (言語・文学編)、S. 291–311.
- 川島 淳夫 (編) (1994) : *ドイツ言語学辞典*. 紀伊國屋書店.
- 菊池 慎吾 / 鐵野 善資 (編) (1996) : *独和中辞典*. 研究社.
- 国松 孝二 (編) (2005) : *独和大辞典*. 小学館.
- Langenscheidt. *Großwörterbuch Deutsch als Fremdsprache* (2010). Hrsg. von Dieter Götz, Günther Haensch, Hans Wellmann. Berlin, München, Wien, Zürich, New York.
- Lee, Sun-Muk (1994): *Untersuchung zur Valenz es Adjektivs in der deutschen Gegenwartssprache. Die morphosyntaktische und logisch-semantische Bestimmung der Ergänzungen zum Adjektiv*. Frankfurt am Main, Berlin, Bern, New York, Paris, Wien.
- 中山 豊 (2011) : 中級ドイツ文法—基礎から応用まで—. 白水社.
- 信岡 資生 (2011) : *クラウン独和辞典*. 三省堂.
- Pittner, Karin / Judith Berman (2004): *Deutsche Syntax. Ein Arbeitsbuch*. Tübingen.
- Schumacher, Helmut / Jacqueline Kubczak / Renate Schmidt / Vera de Ruyter (2004): *VALBU—Valenzwörterbuch der deutschen Verben*. Tübingen.
- 関口 存男 (1966) : *ドイツ語学講話*. 三修社.
- (1983) : *独作文教程*. 三修社.
- Sommerfeldt, Karl-Ernst / Herbert Schreiber (1983): *Wörterbuch zur Valenz und Distribution deutscher Adjektive*. Leipzig.

- Stănescu, Speranța (Hrsg.) (2004): Die Valenztheorie. Bestandsaufnahme und Perspektiven. Frankfurt am Main.
- 田中 春美 (編) (1988): 現代言語学辞典. 成美堂.
- Tarvainen, Kalevi (2000): Einführung in die Dependenzgrammatik. Tübingen.
- Tesnière, Lucien (1980): Grundzüge der strukturalen Syntax. Hrsg. u. übers. von Ulrich Engel. Stuttgart.
- 富山 芳正 (編) (2011): 独和辞典. 郁文堂.
- Weber, Heinz Josef (1992): Dependenzgrammatik. Ein Arbeitsbuch. Tübingen.
- Wöllstein-Leisten, Angelika / Axel Heilmann / Peter Stepan / Sten Vikner (1997): Deutsche Satzstruktur. Grundlagen der syntaktischen Analyse. Tübingen.
- 在間 進 (1992): 詳解ドイツ語文法. 大修館書店.
- Zifonun, Gisela / Ludger Hoffmann / Bruno Strecker et al. (1997): Grammatik der deutschen Sprache. 3 Bde. Berlin, New York.